愛知県農業の現状と将来展望

（愛知県農業総合試験場長 農学博士　米村　浩次）

愛知県の農業は全国第５位の生産額を持ち、有数の農業県である。発展の要因は都市化の中で、工業の発展を積極的に農業に取り込んできたことにある。現在の農業はバイテクなど新しい技術の開発によって大きく変化してきた。また、雇用型経営や法人経営も増加してきた。観光農園や産地直売、契約栽培も始まった。一方で、食べ物に対する消費者の要求も強まった。これらの変化は農業におけるビジネスチャンスが拡大したことを示している。今、農業の担い手の減少、海外からの農産物輸入の増加など、農業を取り巻く状況は厳しいが、これからの農業は他産業に匹敵するかあるいはそれ以上に創意と工夫を生かせる魅力的な産業になるであろう。降り注ぐ太陽と豊かな水と肥沃な農地という恵まれた資源を農業技術の開発によって利用促進することは私たちに課せられた責務でもある。

工業発展とともに伸びる農業

愛知県は中京工業地帯の中核であり、トヨタ自動車に代表される大企業が多く、有数の工業県であるが、一方では全国第５位の農業県でもある。しかし、この事実は意外と知られていない。

農業は昔から行われてきたが、工業技術の進歩は常に農業技術の発展や農業の生産性に大きく寄与してきた。豊川用水や愛知用水による用水の確保、ほ場整備による大型機械の利用、効率的な大型機械の開発、野菜、花き、畜産等施設型農業の発展などその事実を示すものは多い。また、最近ではエレクトロニクスによる温室等の自動環境制御、ロボット利用による省力化、バイオテクノロジーを利用した育種などが取り入れられてきた。このように、農業の発展は工業に支えられてきた側面を持つが、本県農業はこのことを如実に示している。

本県農業は、農業機械、施設、肥料、電子工業に至るまで最新の工業に支えられて発展している。単に、夢とロマンの中の農業ではない。工業と農業は密接に係わっており、しかも、農業は自然環境の保全に貢献し、生きる糧としての食料と生活に潤いを提供している。この愛知県における都市化の進展の中での農業の発展は一つの地域のあり方として望ましい一つの姿であろう。

農業の現状と特徴

愛知県の農業の現状を平成３年度の統計からみてみたい。農業粗生産額は3,931億円であり、その構成比は米が12.6%、園芸が56.7%、畜産が26.6%となっている。園芸のうち花きではキク289億円、鉢もの類228億円、カーネーション45億円、バラ28億円であり、野菜・果物ではキャベツ253億円、トマト176億円、イチゴ96億円、オオバ87億円、ミカン87億円などが主なものである。畜産では豚287億円、鶏卵282億円、生乳237億円などである。品目別にみると主要農産物50品目のうち本県の粗生産額が全国10位以内のものは33品目に及び、茨城県と並んで最も多く、中でもキク、鶏卵、キャベツ、鉢もの類、トマトは全国１位である。100億円以上の生産額をもつものも米を含めて９品目ある。本県農業は県内の消費を賄うためだけの地場産地ではない。一方、これらを生産している販売農家数は80,550戸である。この内農業のみで生計を立てている専業農家は10,390戸であるが、男子生産年齢人口（16歳以上65歳未満）がいる専業農家は7,710戸にとどまっている。

販売農家のうち16歳以上の基幹的農業従事者（農業就業人口のうち、ふだんの主な仕事が農業の人）は96,500人であり、その男女別構成比は男子44.0%、女子56.0%、また、60歳以上は50.6%を占めている。60歳未満の基幹的男子農業従事者は17,420人と全体のわずか18.1%である。

このように、農業粗生産額は全国的にみて高い水準にあるが、一方、農家数は減少し、農業労働力の高齢化、女性化がすすんでいる。特に、若い担い手が少なくなっていることは、全国的に深刻な問題となっており、本県も例外ではない。しかし、こうした問題を抱えているが、本県農業の活力が失われたわけでないのは先の生産額に見られるとおりである。そこで、本県の農業の特徴を部門別にみてみたい。

まず、稲作経営をみると、全国で最も早く稲作の組織化が進められた。日本の農地の所有形態は分散零細錯圃制と言われ、個々の農家のほ場は小さな区画で、分散して存在しており、機械利用、水利用の面で極めて非効率であった。そこで、この問題解決のために農家が集団で稲作に取り組み、生産性の高い農業を確立してきた。その後、兼業化の進展につれて稲作の経営受託、作業受託が進み、全国的にみても規模が大きく経営的に優れた受託経営や法人が多数育っている。加えて、近年ではこの受託経営の生産性向上を図るために、集落の稲作を特定の受託経営にまかせる方法を確立し、安城方式、十四山村方式と呼ばれて全国的にも有名になっている。

花き生産は622億円と平成元年以来３年連続して前年対比15%以上の伸びを示し、全国一位の生産をあげている。品目別ではキク、鉢もの類は生産額で他県を大きく引き離している。キクは渥美半島を中心に栽培され、経営規模、生産技術ともに全国の追随を許さない経営が多数存在している。鉢もの類は名古屋市近郊にリーダー的経営が多く、全国から研修生を受け入れながら、経営規模拡大を図ってきている。現在では研修生を中心とした全国的な研究会を組織する経営がいくつもみられる。いずれにしても愛知県の花き経営は、他県と比較して規模が大きく、新しい品目・品種の選択、生産技術の開発を行いながら先駆的な経営を確立している。また、雇用型経営や法人経営も増加しつつある。

畜産では、養鶏が昔から盛んで鶏卵の生産額は全国一位である。最近、九州を中心に企業養鶏による大規模経営が多くなってきたが、本県の場合はこれらの経営と異なり、家族経営が発展した大規模経営が多い。また、酪農経営では、一戸あたり飼養頭数が北海道に次ぐものとなっている。特に、知多半島では大規模な経営がグループとして存在している。養豚も母豚を50頭以上持つ経営の占める割合が全国平均の２倍を越えている。また、３階建て豚舎の建設や有限会社化に取り組むなど先進的な経営も多い。

愛知県においてこのような農業を可能としたのは、都市化や技術進歩に対して積極的に対応しようという農業経営者が多く、この結果、全国的にみて先進的な経営が数多く輩出することになった。

農業技術の進歩とこれからの農業

昔、農作業は這って行われたり、泥まみれで行われていた。現在でもこのイメージが強く、農業が嫌われる一因にもなっている。しかし、現在の農業は全く様相を異にしている。稲作ではトラクタ、田植機、コンバインが使われ、ほとんどの作業が機械化されている。苗は育苗センターで大量に作られ、収穫したコメは乾燥機で乾燥される。は種や肥料散布のためのヘリコプタ、ラジコンヘリも実用化のための試みが行われている。ミツバ、サラダナ、ネギ、トマト等は水耕栽培で周年栽培され、その温室は、コンピュータで室内環境、養液のPH、EC、水温が自動制御されている。バイテクの技術革新も農業分野での実用化が進み、増殖の難しかった洋ランが大量に生産され、増収のためにイチゴ、カーネーション、フキなど多くの作物で無病苗が利用されるようになった。キク、イチゴでは電照、冷蔵などを利用した技術開発によって周年栽培技術が確立している。酪農、養豚、養鶏では飼料給与、搾乳、集卵、除糞などほとんどの作業が自動化されている。このような工業技術に裏付けられた農業技術の発展は、農業経営に大きな変化を及ぼしている。

また、パートをいれた雇用型経営も花き、畜産を中心に増加しつつあり、経営形態も家族経営から有限会社、農事組合法人など農業法人へ転換するものも見られるようになった。

農産物輸入の増加は、消費者に食べ物の質に対する認識の強化をもたらしたが、一方、生産者は、消費者ニーズへの関心を高め、農業経営のあり方を総合的に見直すものも出てきた。

このように現在の農業は技術的、経営的に大きく変化してきた。また、社会情勢の変化に伴い農村では農家の多様化が進んできた。このことは裏返せば以前に比べると農業におけるビジネスチャンスが拡大し、魅力ある農業経営の基盤が整ったことになる。これからの農業は、他産業に匹敵するあるいはそれ以上に創意と工夫を生かせる産業となるであろう。

おわりに

日本には、降り注ぐ太陽、豊かな水、肥沃な農地がある。まさに、恵まれた資源である。世界中どこを見回しても日本ほど作物の生育に適した農地を持つ国はそう多くない。この資源を十分に生かしうるのは農業という産業をおいて他にはない。また、この日本に与えられた資源を継続して有効に利用することは、都会に住む人、田舎に住む人に対して生活に潤いを与える自然環境と安全な食料を保償できるであろう。大地という自然の中で行われる農業は、少なくとも日本においては、その発展によって自然を含む地域環境を維持し、食料の確保を可能にした。

今、農業は、自由化対応、担い手確保、中山間地過疎対策、経営確立などの問題を抱え厳しい状況にあるが、私たちに与えられた貴重な資源を放棄するのではなく、農業技術の開発によって有効な利用促進を図ることは、私たち農業研究者に課せられた重要な責務でもある。

第１図　愛知県における作目別農業粗生産額